

SGH 東北復興防災研修を実施しました

12月21日(水)～24日(土)の3泊4日で、高校3年・2年・1年のGLコース/GJクラスから選抜された生徒13名が参加したSGH東北復興防災研修を実施しました。この取り組みは今回で3回目となります。本校研究開発課題の具体的構想テーマである「貧困の撲滅と災害の防止・対策～世界平和の実現のために～」の「災害の防止・対策」を考えるため、実際に東日本大震災の被災地を訪れ、被災された方々からお話を伺うことで、「自分事」として震災を捉える機会としています。また、東日本大震災ではどのような被害があったのか、この6年近くの間、被災された方々はどのような想いで過ごしてこられたのか、町はどのように復興しているのか、復興のために高校生はどのような活動を行っているのかなどを知ることによって、私たちは被災地に何ができるかを考えることを目的としています。さらに、震災や防災について知ることによって、これからの震災に備え、震災時に私たちには何ができるのか、何をしなければならないのかを考え、未来へつなげていくことを目指して現地に向かいました。

本年度は、過年度にも増して入念な事前学習を繰り返したのち、女川町・石巻市・仙台市で、現地の被害・復興状況についてのお話、被災された方やご遺族のお気持ちを伺い、フィールドワーク等を通して、震災・復興・防災についての学習を深めました。

1日目 研修Ⅰ 仙台市にある仮設住宅跡地・市営住宅訪問

朝、京都駅から新幹線で移動し、昼過ぎに仙台に到着しました。多くの生徒たちが、宮城県や東北を訪れるのは初めてで、その都会的な街並みの駅ビルやショッピングセンターを見て新鮮な思いを持ったようでした。その後、バスに乗り込み、引率教員が2年前にプライベートでボランティア訪問をした経験のある仮設住宅の近くまで移動。久しぶりに訪れた仮設住宅は取り壊し工事を行っていました。仮設住宅の取り壊しは、復興が進んでいることの証であると同時に、新たにできつつあったコミュニティの崩壊でもあることを思うと複雑な思いに捉われます。住民の皆さんは、「集約仮設」と呼ばれる他の仮設住宅やそれぞれのところに引っ越されたとのことでした。

仮設住宅跡地を見た後に、災害復興公営住宅である市営住宅を訪問しました。生徒たちはここの責任者の方、仮設住宅の元住民のご夫婦、市営住宅の役員の方からお話を聴いて、色々と感じ、学んだようでした。特に、震災時や震災後のご経験、避難時の注意について真摯に聞き入っていました。また、こちらからの多くの質問にも丁寧にお答えいただきました。

市営住宅の訪問後、バスで女川町に向かいました。この1時間半弱の移動中の車窓から眺める街



の風景も大きな学びとなりました。何もない所、仮設住宅がある所などと徐々に移り変わっていく車窓。日が少し傾く中、海沿いに走る道路。そして、女川駅近くに着いて…。なんと、コンビニエンスストアがあり、美しい商業エリアがあり、ライトアップさえ、されていたのです。街の復興について、約2年前当時の姿を知る引率教員からの話に、生徒たちは聞き入っていました。生徒たちは、「津波の避難タワーの看板があった。」「段々殺風景になってきて。一歩ずつここに進んでいるのがわかった。きれいなまちづくりをしていくのがすごいと思った。」「女川の方にくると道の周りには何もなかった。」などの想いを持ったようでした。

研修Ⅱ 振り返り、石巻で被災された方・NPO カタリバ様のスタッフの方・本校教員の話

夕食後は、振り返りを行い、お互いの意見を共有しました。また、その場に RIVIO（リビオ 立命館高校ボランティア情報局）の活動で大変お世話になっている石巻市在住の阿部さんが来てくださいました。「(東日本大震災の) あんな思いをしても、人は忘れる。先日の地震の時も、津波が心配されていたのに、逃げない近所の方がおられた。震災の時のように、悔しい思いをしたくない」。阿部さんのこの言葉が忘れられません。さらに、2日目にお世話になる NPO カタリバ様の林さんも来てくださり、お話をしてくださいました。「震災を通して、高校・大学生活の行動が変わるきっかけを与えられたら」「日常に活かしていける研修にしたい」と話してくださいました。その後、上記 RIVIO 担当である引率教員からも「何が一番支えになって、復興をどうしていくのか」「前向きにがんばっている人がいる」などの話がありました。



2日目 研修Ⅲ 女川町観光協会の方からのお話、フィールドワーク

女川町観光協会の遠藤さんから、東日本大震災で女川町がどのような被害を受けたのか、ご自身の体験、家族や友人を失ったお話、どのようなお気持ちでこの6年近くを過ごしてこられたかなどのお話をお聴きしました。その後、実際に女川駅や駅前商業エリア、横倒しになった派出所などを案内していただきました。また、女川町役場の櫻井さんは、お仕事の合間に来てくださり、町を作る側からのお話もお聴きすることができ、非常に有益でした。女川町役場も被災し、プレハブの町役場でこの6年間お仕事をされておられ、「生かされた命だから」と女川町のためにご尽力されていらっしゃるというお話がすごく印象的でした。お忙しい中、お話に来てくださり、本当にありがとうございました。



研修Ⅳ 3.11 を学びに変える旅

その後、NPO カタリバ様の「3.11 を学びに変える旅」という研修に参加しました。大川小学校を訪問し、佐藤敏郎先生にお話を伺いました。佐藤敏郎先生は大川小学校のご遺族であり、震災当時女川の中学校の教員をされていました。ご遺族、教員の両方の気持ちを理解されており、現在学校は離れ、防災教育にご尽力されておられます。

「(大川小学校で亡くなったり、行方不明になった 74 人の命は) 救えたはずの命、救うべき命」「ここはこの世の終わりではない。始まりの場所なんだ」「ここは子どもたちが走りまわっていた場所」。これらの胸に刺さる言葉の数々。生徒たちは、実際に震災の日に子どもたちや先生方がいた場所に立ち、避難するまでの 50 分間に何を考え、どのような気持ちだったか必死に感じようとしていました。児童・生徒を守るべき立場である教員が子どもたちを救えなかったということを見ると、心中察するに余りあるものがありました。

その後、近くの公民館に移動し、ワークショップを行いました。「子どもたちや教員は避難するまでの 50 分間に何を考えていたか」「どうして逃げられなかったのか」をみんなで考え、グループで話し合い、発表しました。生徒たちの発言に対し、佐藤先生からも質問やコメントをいただきながら、みんなで考えを深めていきました。「大川小学校まで津波が来ると想定できたと思う人は手を挙げて」との問いに、手を挙げた生徒はいませんでした。「ちょうどこの部屋には 13 人の生徒がいるよね。当時の先生の数 11 人。こういう状況だったんじゃないかな」というお話からは、当日の校庭の様子が再現されたようで、恐れすら感じました。では、どうすれば 1 人でも多くの人を救えるのか、どんどん話し合いが深まっていきました。

最後に、本研修でリーダーをしていた高 3 生徒が「私たちはこうやって学んだことを京都に持って帰って、伝えなければいけない」と泣きながら語っていたのが印象的でした。また、ある生徒が発表の際に、本校の避難訓練について「しているが、生徒の危機感が十分ではない」との思いから、本校のそれをさらに良いものに変えていくためにはどうすればいいのかということについて話し合いました。学んだことが ACTION につながっていく。そんな希望が見えた時間。非常に意義深く、貴重な学びをし、深く考えた素晴らしい研修になっていることを実感できる時間。NPO カタリバ様、佐藤敏郎先生、本当にありがとうございました。

後日、研修をしてくださった NPO カタリバ様が以下のブログ記事を書いてくださいました。

【レポート】「3.11 を学びに変える旅」～立命館高等学校の場合～

<https://www.collabo-school.net/news/trip/2017/01/17/20077/>



研修Ⅴ 女川在住の高校生との交流

夜には女川町に住む高校生と交流を行いました。同世代の高校生が震災の時にどのような経験をし、どのような6年間を送ってきたのか、どのような気持ちだったのか、今は何を頑張っていて将来どうしていきたいのか、なども話を聞くことができました。生徒たちは、彼らが女川のことが大好きで、町のことを真剣に考えている姿が印象的だったようです。



3日目 研修Ⅵ フィールドワーク シーパルピア女川ハマテラス開業宣言、女川駅前商業エリア開業1周年祭見学

この日は、昨年開業した女川駅前商業エリアが一周年を迎え、新たに商業施設がオープンし、記念式典や記念行事が行われました。これも「復興」を感じる良い機会だと考え、生徒たちは参加しました。女川町は、震災後にその被害の大きさや「復興のトップランナー」の認定を受けるなど、メディアなどに取り上げられることも多く、この日も多くのテレビ局や新聞記者などが取材にきていました。生徒たちは、この商業エリアでの散策から、女川町の方々の優しさや温かさに触れることができました。



研修Ⅶ 女川原子力発電所 原子力発電 PR センター見学

東日本大震災の時に、ほとんど被害を出さず、避難所として3か月間場所を提供していた女川原子力発電所の原子力発電 PR センターを訪れ、お話をお聴きし、センター内の見学をしました。どれほどの防災対策を行っていたのか、震災当時どのように対応されたのか、また、実際に被害がほとんど出なかったことなどを教えていただき、また原子力発電の仕組みやエネルギーについてもわかりやすく教えていただきました。



研修Ⅶ 女川町での班別 インタビュー

商業班、漁業班、観光班、医療班の4グループに分かれて、インタビューをさせていただきました。事前に連絡シアポイントメントを取ったり、質問事項を考えたりしてから、インタビューに臨みました。それぞれの班が、実際に女川町の方にお話をお聴きすることで、様々なことを感じ、学んだようでした。非常に良い出会いになったようで、またぜひお会いしたいし、女川にも行きたいと熱く語っていたのが印象的でした。



4日目 研修Ⅷ 高校生の時にボランティアをしていた方のお話

最終日、仙台市に移動し、さらに一部の生徒は志願して高校生の時にボランティアをしていた方

にお話を伺いました。高校生の時にどうして東日本大震災で被災された方々や仮設住宅でボランティアをしていたのか、現在大学でどのような活動をされているのかなど、お話を伺いました。

この研修は、事前準備から充実した、多くの良い出会いに恵まれた素晴らしいものになりました。京都に帰ってきてからは、実際に本校の避難訓練を変えるため、具体的に避難訓練の改善案を作成したり、他の生徒に私たちが今回の研修で学んだことを伝え、避難訓練の大切さを伝えるための発表の準備を行っています。東日本大震災で亡くなられた方々、被災された方々、ご家族やご友人を亡くされた方々から、今も復興に向けてがんばっておられる方々のこと、今回お会いして、私たちが温かく迎え入れてくださり、お話をしてくださった方々への感謝も忘れず、私たちは京都でできることをしていきたいと思っています。今回の研修でお世話になった方々、本当にありがとうございました。



以下、生徒の感想（一部抜粋）です。

「今回の研修で何度も聞いた『想定外』という言葉。想定というものをなぜ私たちはしてしまうのだろうと思った。こうやって学んだ私たちはその大変さを伝えていかなくてはならないと思う。これから私たちは避難訓練を変えようと思っているが、それには多くの人の協力が必要だと思うし、簡単なことではないと思う。けれど、これは全校生徒に防災の大切さを伝える大きなチャンスであると思う。だからこそ、これから受け継がれていくようなものをつくれるようにしていきたい」

「女川は未来に向かって動いている気がしました。実際に見て感じることで、大川小学校のような苦しみも、またそれをどう変えていくか、というのを考えることができました。話して下さったほとんどの方が、この被害や災害による死者をもう出してほしくない、繰り返さないでほしい、という思いでお話していただいた気がしました。私たちはこの思いを受け継ぐべきで、自分に今、何ができるか、何をすべきなのかを考えながら毎日を過ごしていこうと心に決めました。1日1日を感謝して、『後悔』のないようにしたいと心の底から思いました。私がこの東北で一番学び、心に染み込んだこと、それは『人と人のつながりの大切さ』です。さらに、地元の方から学んだ大切なこと、それは地元愛です。その地元が好きという気持ちが一番の防災であり、復興への原動力になるのだと思いました」

「震災が起こった当時小学4年生だった私はずっと実際に足を運んで何か現地の方々の役に立てることがしたいと思っていました。(中略)やはりまだまだ手の届いていない場所がたくさんあり、5年経った今でも仮設住宅に住んでおられる方がいたり、心の傷が癒えきっておられないなと思いました。皆さんはいつも笑顔でいねいに私たちをもてなしてくださいました。笑顔がとっても素敵で、被災していない私が勇気をもらうほどでした。皆さん、笑顔がいっぱいだし、『段々と現地の方の傷は消えつつあるのかな?』と思っていた私ですが、ある先輩が『つらい事はあるけれどそれを笑顔をつくることによって忘れようとしているんじゃないかな?』と言っていました。それを聞き、確かにまだまだすべてがクリアになったわけではないけれど、皆で手を取りあっておられるんだな、と改めて考える機会となりました。今回の研修内容がとても濃くて、改めて自分の価値観を深く考えなおすことができました。『昔のことじゃなく、今も苦しんでいる方々もおられる。けれど、その方々は前を向いて必死に立ち直ろうとされている』ということをみんなに伝えたいです。終わったことではなく、そこからスタートだと私は思いました」